2 研究者の背後に

メイ・クリスティン・ボン・コルデニリョ

「ある事物、すなわち単なる戸が、躊躇、誘惑、欲望、安全、歓迎、敬意のイメージをあたえるとき、たましいの世界では一切がなんと具象的になることか！もしもひとが自分がとじた戸、自分があけた戸、自分があけようとおもっている戸、これらのすべての戸についてものがたるならば、かれは自分の生をのこらずつげることになろう」
(Bachelard 1994, 224＝バシュラール 2002, 374)[1]

人間は、どこに行っても自分の存在を示すことができます。人間の居住地は、それが恒久的なものであれ、一時的なものであれ、歴史の中でさまざまな地域に何らかの足跡を残してきました。個人的な観点から言えば、私たちは常に、**この世界に自分の居場所を見つけ、あるいは足跡を残すものだということを理解しています**。また、仏教の教えでは、私たちの主な目的は「ここにいること」であり、「現在に存在すること」であると説いていることもよく知られています。より高い目的を見つけるために努力しているにせよ、ただここにいて、自分の人生や世界をより住みやすい場所にしようと努力しているにせよ、私たちは自らの足跡を残しているのです。

「Project DEAI: 場所を共に耕す」のコンセプト全体に対する私の見方も、それと同じです。このプロジェクトは、フィリピンのミンダナオで足跡を残そうと努力を始めたばかりの研究者である私たち三人をめぐるものでした。青山和佳先生とネリー・リンバダン先生のご協力のもと、このプロジェクトによって、自分自身の取り組みの原点をたどり、どんなに小さいものであれ自分の業績と研究への貢献を評価し、将来の努力への道筋を見出すことができました。このプロジェクトは、私の人生の扉を開こうとする、非常に個人的なものです。本稿では、エキサイティングで挑戦的な旅を始めたばかりの、ひとりのミンダナオの研究者の苦悩と夢を示すことができればと願っています。

1　訳注：原文は英語。日本語訳は、ガシュトン・バシュラール著、岩村行雄訳『空間の詩学』筑摩書房、2002 年に拠る。

科学技術省によるダバオ市トリルでの海岸清掃活動中の筆者。

私の背後にいる人

私は常々、現在の自分は過去に起きたことだけでなく、自分自身の決断の結果であると信じています。大きなトラウマになるような経験であっても、それを将来のための道具として使えば、より良い人間になることができるのです。私の過去は決して好ましいものではなく、多くの人は私のような経験をしたいとは思わないでしょう。私は非嫡出子で、祖父母のもとで育ちました。良い面を言えば、この経験によって祖父との絆を深めることができたことです。祖父は、私がコミュニティ活動に従事するきっかけを与え、励ましてくれました。まだ4歳だったときに、戒厳令や1986年のエドサ革命、環境保護や平和活動についての歌を教えてくれました。ただ、子どもだった私は、ありがたみを感じませんでした。友達が童謡を習い、ディズニー映画を見ている間、私は社会貢献的な歌を習い、例えばイラク戦争の最新情報を見ていましたが、当時はそれが何か理解できなかったのです。

祖父は、地域の人びとや社会での役割を知るきっかけになるからと、教会の活動に参加するよう勧めてくれました。祖父はいつも忙しくしていましたが、時間を見つけてはよく話をしてくれました。バゴボ[2]の隣人たちと遊びながら育った

2 バゴボ（Bagobo）はミンダナオの民族言語集団のひとつ。

子供時代、第二次世界大戦中の兵士としての体験、さらには日本占領下での曽祖父母の生活まで様々でした。また、ラテン語のお祈りや、基本的なコイネー・ギリシャ語も教えようとしてくれました。私にとって祖父が初めての歴史の先生であったことは間違いありません。自分の体験に基づいた歴史を教えてくれる、そういう先生でした。しかし、当時の私はその価値が理解できず、祖父の話はのちのち学問的に使えるというよりは、個人的なものだと感じていました。

ある時、祖父に「引退してアメリカに移住することもできたのに、なぜまだ教会や地域に奉仕しているのか」と尋ねたことがあります。祖父は厳しい表情で、「自分の罪と先祖の罪を償うためだ」と言いました。そして、自分の父親も、先住民[3]の土地を奪ったスペイン人のひとりだったし、たとえそれが職務であったせよ、自分自身も兵士として手を血に染めたことがある、と続けました。つまり、祖父は社会奉仕活動によって、何らかの形で「贖罪」したいと考えていたのです。

祖父が示してくれたインスピレーションと模範に導かれて、私は教会組織や市民ボランティア団体に参加するようになりました。抗議集会に参加したことも覚えています。記憶に残っているのは、私がまだ高校生のときに開催された死刑制度復活への抗議集会です。政治と批判的思考について祖父が教えてくれたことは、私が学部で政治学を専攻し、哲学を副専攻したときに役立ちました。そして、

地域保健に関する研究を行い、バグンバヤン、ムラン、ジェネラル・サントス市の自治体保健担当者と研究結果を共有した。

3 ルマド（Lumad）とは、ネイティヴ、あるいは先住民を意味するビサヤ語の言葉。

人類学の修士号を取得するための勉強を始めたとき、先住民に関する祖父の話がとても役に立ちました。もっと詳しく聞いておけばよかったと後悔したこともありますが、それでも祖父から話を聞けたことに感謝しています。

私自身、先住民自決運動について学ぶようになり、祖父が先祖に代わって償いを行おうとする理由がわかりました。自分でも先住民の人びとから話を聞く機会を得て、彼ら・彼女らのために権利擁護や政策提言などのアドボカシー活動をするようになりました。私にできることは、できるだけ多くの場で、こうした人びとの物語を伝えることです。

背後にある経験

先祖代々のルーツもさることながら、人生における重要な経験も、私のアドボカシーを形成しています。具体的には、家庭内虐待、10代で母親になったこと、結婚生活から抜け出すために経験しなければならなかったスティグマ、夫と別れた女性に対して否定的な文化の中で生き続けることなどは、女性を支援するという私のアドボカシーに火をつけました。こうしたトラウマが自分自身を発見することにつながったのです。それは困難な旅であり、決して誇れるものではありませんでした。しかし、私は今の自分に満足していますし、これまでの経験が私を女性として強くし、形作ってくれたことに感謝しています。

私は、二人の子育てで大変な時期に、大学卒業を目指しました。家族を養うためにより良い仕事に就くためももちろんありますが、子どもたちに教育の大切さを伝えたいと思ったからです。奨学金のために成績を維持しながら仕事もするというのは大変な苦労でしたが、大学ではジェンダー意識を高めるためのクラブに参加し、女性に対する暴力に反対を唱えました。

私の卒業論文は、フィリピンのダバオ市における女性開発条例の実施についてでした。私は自身の経験によって、女性についてより深く理解し、それに伴う葛藤を理解するようになりました。Hilsdon（2009）の研究は、植民地主義者が家父長制社会を押し付けている国では、「見えない存在」であることが女性という言葉と結びついていると明言しています。私の論文では、女性が先住民である場合、事態がより悪くなることを付け加えました。

このような問題意識を実践に移したのは、南コタバト州レイク・セブの「レイク・セブ先住民女性織物組合」(LASIWWAI）で約一年間、地域開発ボランティアとして活動したときのことです。私は、助成金の提案やさまざまな開発プロジェクトの実施において、組織を支援しました。大変な仕事ではありましたが、やりがいのある経験でした。先住民の女性たちが、押し付けられた差別から自分

レイク・セブの先住民女性織物組合 (LASIWWAI) でのボランティア活動中、
ティボリ・ドリームウィーバーズと共に。

たちの文化によって立ち上がろうとする姿を目の当たりにし、インスピレーションを得ました。

ビジョン

私たちはしばしば、いくつ研究発表をしたか、いくつ研究組織を作ったか、という数字で研究者の影響力を測ります。これは研究者の業績と相関する有効な方法です。しかし、私たちは研究者を一人の人間として見る必要があります。個人的な歴史、家族や人間関係における問題、経済的な苦労、そして不安や精神衛生上の問題さえ抱えた一人の人間として見る必要があるのです。Project DEAIは、それが可能でした。判断や差別を恐れることなく、それぞれの研究者の人間性を開花させるプロジェクトだったのです。私は自分自身の原点をたどり、明確な未来像を伝えられるようになりました。タイトル通り、このプロジェクトは参加者にとってバーチャルなホームであり、絆であり、安全な場所でもありました。研究者は、一人で仕事をすることも、さまざまな仲間と一緒に研究することもあり、このプロジェクトのようなつながりや道程は、成長や自己発見にとって不可欠なものです。このプロジェクトは終わるかもしれませんが、私自身の見方や仕事に対するビジョンに影響を与えました。つまり、このプロジェクトは私の過去と未来への扉を開いてくれたのです。

引用文献

Bachelard, Gaston, M. Jolas, and John R. Stilgoe. 1994. *The poetics of space*. 224.

Hilsdon, A. M. 2009. Invisible Bodies: Gender, conflict, and peace in Mindanao. Asian Studies Review, 33(3), 349-365.

Hilsdon, A. M. (2009). Invisible Bodies: Gender, conflict, and peace in Mindanao. Asian Studies Review, 33(3), 349-365.